

【嘉数高台の戦闘③】

悲劇の米須戦場

M・j（当時三十三歳）

小隊は嘉数高地で全滅

昭和十九年に防衛隊に入隊した私は、現在の普天間飛行場のあたりで道路に穴を掘り、その上に竹を敷いて土をかぶせ、敵の戦車を落とすための細工作業に従事していた。

石部隊の事務所は、私の部落（真志喜）の宮城正義さんの家に置かれ、防衛隊は別の家を利用していたが、私たちもそこに宿泊して諸作業や訓練をしていた。

訓練はまず負傷兵を運ぶ担架かつぎと、竹槍訓練であった。

いよいよ戦火が激しくなって、私たちは小隊（四〇人）から四人一組になり、牧港（浦添村・現市）へ配置された。現在の国道五八号線沿いの丘（キリスト教会のあるところ）で、この陣地は自然壕を利用した堅固な要塞になっていて、海の方へ銃を向け、いつでも戦闘開始できる体制をととのえていた。

だが、昭和二十年三月下旬から、牧港も米軍の猛攻を受けるようになった。四月一日ついに米軍は上陸し、一瞬にして火炎に包み込まれた私たちは、牧港の陣地から敗退して嘉数高地へ逃げるようになった。しかし、嘉数高地は日本軍と米軍が火花を散らしている激戦地であり、私たちはたいへんなところへ退避したものだと思った。そこでは石部隊が激しい抵抗を見せ、一進一退の攻防がくり広げられ、米軍は思いのほか手こずったようである。

このままではこちらの命も危いと判断して、移動することを決め、夜間首里方面へと退避すべく原野や畑を走り、浦添の当山部落へ落ち

着いた。私たちの小隊は牧港に配置された四人以外、嘉数高地で全滅した。

そのとき、照明弾が空を舞い、当山一帯が昼のように明るくなったかと思うと、その後すぐにビュンビュン弾が落下して、私たち四人はここで散りぢりになってしまった。照明弾がヒューと鳴れば、すぐ弾が音をたてて炸裂し、狙いうちをされているかのようにだった。

私は、他の三人とはぐれてしまい、一人首里の末吉に退避した。この末吉一帯も、嘉数同様激戦地であった。四人のうち一人は比嘉カマ、もう一人は宮城、そして比嘉といい、いずれも真志喜の出身者であった。その中で比嘉カマさんも同じ方向に逃げていたようだ。私たちは手榴弾をいざというときのために、各人大切に持っていた。

負傷した手にウジ虫が

私は末吉に一カ月間も身動き一つできず、留まっていた。首里がこんなに激戦地になっているとは予想もしてなかった。ある日、私が水を汲みに外へ出たとたん機関銃で、左の手の甲をぶち抜かれ、熱いと思った瞬間鮮血がとび散り、その時初めて弾丸を受けたことがわかったのである。出血してから今度は痛みがひどくなり、慌てて林に戻り手当てをした。

しかし、この林の中には危いと考え、壕を探して傷の痛みをいやそうと林をとび出た。そうして、やっと墓を見つけ中に入ろうとしたら、中にはすでに人が入っておりスシ詰めであった。私はその墓に入る事ができず、仕方なく近くの岩の前に立っていると、いきなりヒューと弾がとんできて私の額をかすめた。もう少し前の方に立っていたら、完全に弾丸が頭を貫通していたにちがいない。

いよいよここにも長く留まることが不可能となり、おろおろしながら兵隊たちが隠れている林に戻って身を伏せていたが、機関銃で受けた手の傷が悪化して青黒くふくれて腐れ、そこへウジが湧きその処置

に困ってしまった。なにしろ薬もなく、食料用の油と塩を混ぜて包帯したが、それでもウジ虫が出て効き目がなかった。

末吉では多くの兵隊や民間人の犠牲者が続出し、凄惨な場所だった。私は末吉にいる軍隊の上官に、

「私は怪我をしてもう戦えません。飯を喰うだけじゃまになるので後方にさがらせてくれませんか」

とお願いしたら、

「負けるのはわかっていいるから、さがってよい」

と許可が得られたので、さっそく退避することになった。

母親の死体にすぎる赤ん坊

当山で散りぢりに退避した他の三人のうち、比嘉カマさんは末吉に来て、さらに島尻へ南下したようだ。

私は日の暮れるのを待って、末吉の林を抜け出し、南へ向った。野原や畑、岩山と、あちこちさまよいながら黙々と歩きつづけた。道端には死体が石ころのようにころがっていた。一番かわいそうだと思っただのは、場所はよく覚えていないが、赤ちゃんが這いつくばりながら屍と化している母親のオッパイをしゃぶっていたことである。こういう痛々しいことに出会っても、どうすることもできないのが戦場だと思いつつも、あの赤ん坊の姿は、今だに忘れることができない。

このようにさまよい歩いて、一カ月めにたどり着いたところが糸満の米須部落だった。

米軍は圧倒的な優勢のうちに一斉に南下して、島尻へ日本軍を追いつめ、それに民間人も巻き込まれ、そのまま沖縄本島の南の最果てまで追われたのである。

米須の海岸に着き、アダン林に身を隠していたが、六月十八日の朝、アダン林に艦砲がうち込まれ、多くの人びとがそこで死んだ。同僚の比嘉カマさんも米須海岸へ逃げてきて艦砲射撃で死んだ。彼がここへ

逃げてきて弾にあたつて倒れたことを聞いて驚き、すぐに出向いたが、私がかけたときはすでに息をひきとっていたのである。

私は最初アダンの葉陰に隠れていたが、そこでは危険だと思い場所を変え、近くの農業溜池の側に移ったため助かった。米須の戦場はどこが安全ということはなく、私の立っていたところは野ざらしであった。死に対してはいつも覚悟をしていたので怖さはなかったが、苦勞してここまで逃げてきたので、生きたいという望みがあつた。この米須のアダン林は修羅場のものであつた。特に中部方面の人が追いつめられてきていた。

このように砲弾がとびかう中、突然私の側で泣き叫ぶ声がした。見ると赤ちゃんをおぶっている三十代の婦人がいた。六十代のおじいさんも一緒だったが、その婦人は砲弾に股をやられて転倒し、苦しうに喘ぎながら、「ハキサミヨー、ミジヌマチトラセー（水を飲ましてくれ）」

と盛んに訴えていた。だが絶えまなく砲弾は落下し、怪我人の介抱どころか、我が身を守ることもやつとであつた。あちこちに悲鳴と砲弾の炸裂音がとどろき、全く地獄絵図だった。間もなくこの婦人は死んだと思うが、おぶっていた赤ちゃんもおそらく一緒に犠牲になつたのではないだろうか。

六月十八日午前十一時、米兵はアダン林に進攻し、投降を呼びかけた。すでに包囲され、これ以上逃げることは無理であつた。海と陸からの攻撃で、袋のネズミ同然になり、放心状態のまま捕虜になつた。そのとき米軍は一般住民を先に捕虜にとり、その後軍服を着用している私のところにやってきた。私は今出ていかないと射殺されるにちがいないと思い、自主的に捕虜になつた。そうして、やつと私の島尻での逃避行は終つた。